

中信高校山岳部かわらばん

編集責任者 大西 浩

大町高等学校

大町高校夏合宿・・・①水難の巻 (初日:扇沢―針ノ木峠―針ノ木谷)

小生のIH出張のあおりを受けた大町高校の山岳部は、お盆真っ最中の13日から3泊4日で、合宿を行った。コースは前号でお示した通りであるが、扇沢スタート、扇沢ゴールの一筆書き。登山口までは学校から19km。大町高校ならではの裏山での登山。

参加したのは2年生男子2名、1年生男子2名、女子2名。山仲間北ア北部遭対協の山内氏に同行をお願いし、総勢8名のパーティとなった。初日は、ホームグラウンドともいふべき、扇沢を8時20分に出発。勝手知ったる道を大沢小屋へと辿る。雨は降ったりやんだりしながら、次第に強さを増し、カッパの中は蒸れ、初日から前途が思いやられる。昨日までは、ずっと晴れていたのに「なぜ?」と恨めしく思う。

雪渓尻には大町高校の校章の花であるシラネアオイが5株ほど遅い花をつけていた。雪渓に出るとひんやりとして、むしろ寒いくらいである。今年、北アルプスの雪は全般に少なめだが、妙な残り方をしており、中間部はむしろ例年より多い。ノドを過ぎ、マヤクボ沢の出合についたころから多少視界もよくなり、やや薄日も射してきた。12時25分、針ノ木峠に到着。小屋主の百瀬さんが、例によって歓待してくれた。針ノ木谷を下るといって、「今年は草刈りもしてなくて。」と申し訳なさそうにおっしゃった。さらに「今日女性一人下って行ったが、今年は通る人もまばら、熊には気をつけて。」との話だった。



シラネアオイ

13時、針ノ木谷を下る。下り始めると、針ノ木側に登攀意欲をそそる岩壁がそそり立っている。この谷には至る所岩壁があり、そう思ってみると極めて魅力的だ。いったん回復したかに思えた天気だったが、下るにつれ再び雨脚がつよくなって来た。1時間ほど下ると、水流も出てきて、谷は一気に水が勢いを増した。狭いゴルジュ状の滝はフィックスロープを使って慎重に下らせる。どこまでいくのだろうか、軽装で単独の登山者が我々を抜いていった。下からも一人の青年が登って来たが、谷の中で見たのは、この二人だけだった。時には足首ほどまで浸かりながら、もう全身濡れ濡れの状態で、谷を下っていく。しかし、沢を右に左にルートをファインディングしながらの下降は生徒にとっては魅力的な未知の世界と映ったようである。



針ノ木峠の針ノ木谷入口

13:40、標高2170m地点で一本、さらに14:45、1980m地点で2回目の休憩をする。予定では平の避難小屋までと目論んでいたが、とてもそれは無理だ。そろそろ幕営適地を探す時間である。雨が降っている中、沢の中での幕営は避けたい。そんなことを考えながら下り船窪沢出合(1870m)についた。出合から50mほど戻り、左岸のコメツガの林の中にはいると幸い二張分ならテントが張れそうな場所があった。何回もこの沢を下って

いる山内氏によれば、幕営するならこのあたりが一番よかろうとのことだった。国立公園内は基本的に指定地以外幕営禁止ではあるが、万が一の対応として、どのような場所で一夜を過ごすかを教えるのも、また危急時の対応は万事休してからでは遅いことを教える上でも、今日はここで幕営するのがベストの対応だろうと判断した。15:40、幕営場所を決め、幕営指示。びしょ濡れの身体であっても、テントは快適。濡れ



谷をへつって

は覚悟していたものの、ここで第一の水難発生。なんと中防水をして完璧だったはずの僕のザックの中身がびしょ濡れなのだ。古くなった百均で調達したプラティパスもどきの口に近い部分に小さな穴が開いていたのが原因だった。防水の中での水の滲出は悲惨である！！まあこんなこともあるさと、まったりとお茶を飲み、少しずつぬれたものを乾かし、さあそろそろ夕食の準備とテント内を整理し、食材を出したところ、今度は銀マットの下がびしょびしょである。最初は山内氏のハイドレーションシステムからの漏れ水かと思ったが、それにしても濡れがひどい。せっせとタオルで拭き取っては絞るのだが、間尺に合わない。あげくは銀マットの上まで滲出してくる始末。暫くすると浸水はテント全体に及び、テントは完全に水没状態になった。もう一張のテントも同様らしい。先ほどまでは小降りだった雨が、勢いを増している。原因はグランドシートだった。今回エスパースの4テンに正規のグランドシートを敷いていたのだが、フライを伝った雨水が本体とグランドシートの間にたまり、逃げ場を失って浸水してきたというのが、事の真相だった。この日のメニューは水をたっぷり使う「冷やし中華」というのも皮肉だったが、食事もそこそこに、グランドシートを引き抜いて外した。暫くすると水は引いていった。こんなことで怯んではいけないと、「昔はテントの周りに溝を掘ったものだ」とか「水没したテントで一晩過ごしたことも何度もあるなあ」などと山内氏と昔語りをしていると、生徒は生徒で今年の県大会の最終日のテント水没騒動や去年の夏山縦走のびしょ濡れを面白おかしく話してくれる。雨にも負けぬたくましい生徒たちよ。そんなこんなで、一騒ぎあったが、それもご愛嬌。再び雨が小康状態になると、生徒たちは外で焚き火と決め込んだ。頼もしい輩である。

夜半、雨は再び勢いを増したが、グランドを外したせいか、浸水はなかった。そのかわり、朝食のとき、不注意にも小生がコーヒーをこぼしてしまい、この快適なテン場は最後まで水難にたたられた。・・・こぼしたコーヒーを拭きながら今や雑巾と化したタオルを見ると山内氏のそれには「氷壁の宿」小生のそれには「ホテル景水」の文字が・・・「氷に水」、道理で水にたたられるはずだと顔を見合わせて思わず苦笑い。

水難の相はまだまだ続く。2日目は、霧雨状態の中を予定時刻より20分おくれの5時30分、幕営地を後にする。程なく、船窪乗越からの登山道と合流。直後に七倉川の出合となり、水流も増え、沢もだいぶ幅が広がってきた。左岸には知られざる大岩壁がそそり立っている。飛び石伝いに渡れない箇所も多く、ところどころ足首、時には脛までの渡渉を何回か強いられながら不分明なルートをファインディングしながらの下降は、ちょっとした沢下り。ロープを出すような場面はなかったが、高校山岳部には少しハードルが高い。しかし、山内氏のサポートがあるので、不安はない。(以下、次号)